ISSN 0915−6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

1998. 3. 10 No.18

Eastern Japan Section, Association of College and University Archives of Japan

1997年10月14日(火) 全国大学史資料協議会 1997年度全国研究会基調報告

「学校史編纂の課題と目標」

東北学院大学副学長 出 村 彰

この度、全国大学史資料協議会に参加を許され、他の諸賢と並んで報告の機会を与えられたことは光栄の至りである。筆者は個人的にはキリスト教史、中でも16世紀の宗教改革史を専攻する一人の研究者に過ぎないが、10年ほど以前に、勤務する東北学院の学校史（創立百年史）の編纂・執筆に大幅に関わった事情から、極めて限られた経験と視野からではあるが、上記主題について所感の一端を記すことにしたい。

確かに学校史編纂、あるいはそれを前提とする資料（文献や物品）の蒐集・整理・保存といった事業は、教育と研究の共同体としての学校の謂わば日常的な営みの一つであり、程度のいかんを問わず、大学を含めてどの学校でも現に遂行されているところであろう。しかも、学校史というものは（最近の自己点検・評価白書などでさえも）毎年、あるいは数年置きに定期的に編集・刊行されるものとは言えない。多くの場合それは創立何周年かの記念事業の一端として実現されるのが常である。冒頭に記すには余りに卑俗的に聞こえるかも知れないが、この「祝賀」出版の意味と、純粋な史学方法論的厳密さ・公平さとが、葛藤・摩擦を起こすことなく両立するならば、まことに幸いであるが、日本の近代教育史のように、精々百数十年にしかならないような場合、事柄を見極めるほどの距離を置くことができるかどうか、直ちに問題となるだろう。

一般論はさておき、本学の百年史編纂の経験から語ることをお許し頂きたい。百年史に先立つ学校史は「七十年史」であったが、執筆者が国文学の教授だった事情もあって、文体は流麗・端正、公刊当時は学校史の範とまでも称賛されたのであった。しかし他方、記述内容の出典の明記など、史学方法論的には問題が残ってしまった。謂わば追実験の可能性の問題である。従って、その際に用いられたはずの直接資料の保存への関心も高まらず、結局は百年史は「補遺」としてではなく、創立当初からの再記述の途を選ばざるを得なくなった。アーカイヴズ理念の欠如は、多くの貴重な資料の散逸を招き、時間の経過（三、四世代）も決して有利には働かない。「時宜」の大切さを思わせられる。

東北学院の場合には、その創立と発展の歴史からしても、在外資料の重要性は言うまでもないが、七十年史は種々の制約からその活用が全く不可能であった。もしも今回の百年史に何らかの特色があったとすれば、在外一次資料の大幅な発掘・探索・蒐集・整理・解読に基づく新しい知識と洞察であったろう。筆者自身、二度の夏休みを米国東部の関係機関の古文書館にこもって過ごし、数万枚の一次資料を手にすることが出来た。例えば、創立の前後、米国の母教会から派遣されて来た宣教師たちが、しかも100年後には当の日本人側によって解読される日が来ようとは夢にも思わずに、現地から書き送った何千頁にも上る書簡・報告書などは、彼らの歓喜も苦悩も、成功も失敗も、あるがままに保存していてくれた。在外資料の入手に触発されて、現に手

元にあったのに、その資料的価値に気付かなかった国内資料にも新しい目を向けることが可能となった。多くの旧家を訪ねては、ゴミ収集車の「虎口」から、段ボールにいくつもの資料を救い出した記憶は未だに生々しい。

資料収集を精力的に続行する傍ら、本学の場合は編史に当たって委員会方式を取った。実のところ、委員会そのものは1枚の資料を読むでもなく、一行の原稿を書く訳でもないが、編集事業が全学的関心を喚起するため、何よりも記述を的を射たものとするためであった。委員会の最初の、最大の課題は「時代区分」の決定に向けられた。歴史に携わる者なら誰でもが承知しているように、時代区分そのものが歴史意識を反映する。編集委員会は合宿を含めて会合を重ね、ほぼ2年かけて100年を6時代に区分することとし、しかもそれぞれの時代に「ニック・ネーム」（愛称）を付することまでも取り決めた。それが、黎明時代（心の夜明け）、草創時代（東北を日本のスコットランドに）、興隆時代（Life Light Love）、苦難時代（我は福音を恥とせず）、復興時代（エホバを畏るるは知識の本なり）、そして発展時代（地のきわみまでも）の6区分である。この区分は百周年当日刊行の写真誌から、通史篇、資料篇、各論篇と総計約三千数百頁に一貫して用いられた。

続いて委員会は記述執筆の「視座」、あるいは記述の縦糸と横糸の検討に入った。そこで決定されたのは、一方で「建学の精神」である宗教改革に発する福音主義キリスト教が、その後の時代と場所でどのように自己を発現してきたかという連続性と、それを受容した日本という「場」（特殊性）が、それとどのように向き合って、現在にまで至ったのかという絡み合いを、記述の枠組みとするという方針である。宗教と学問、信仰と理性、世界宗教としてのキリスト教の普遍性と、日本のナショナリズムが代表するような特殊性との葛藤・相剋と言い換えても良いかも知れない。

ここまで来て、実際の記述は責任執筆者と協力執筆者の二人に一任された。有能で献身的な事務スタッフの援助と最新の技術だったワープロの活用によって、通史は2年足らずで1300頁をもって完結、続いて別な解釈と記述をも可能とするための直接資料の編纂、

出村　彰先生の報告

それらをもってしても埋め切れなかった歴史の襞にまで触れるための特殊主題による各論篇と、本学の学校史は総計四分冊をもって一応完成したことになる。最初に在外資料調査に着手してから15年の歳月と、それなりに膨大な経費を投入しての『百年史』の成否の判断は、他に委ねるほかない。

当然のことながら、反省点がないわけではない。むしろ反省点だらけと言うべきかも知れない。例えば、適正な分量である。一冊で1300頁は「持ち上げるのさえ容易ではない」との辛辣な評を耳にした。持って、読んで貰えなければ、学校史は何のためだろうか。もっと内実に入るならば、日本語としての読みやすさ（readability）と、史的厳正さの問題もあろう。脚注が頁の半分を占めるような学校史を知らないでもないが、いかがなものだろうか。ただし、引照箇所等の明示については十分に配慮したつもりである。後日、百五十年史、二百年史を書く者が追認可能でなければならないからである。加えて、学術専門書とか通俗一般書とか、比較的弁別が容易なものと異なって、学校史の場合は対象となる読者層の想定が極めて困難である。史実の客観性と執筆者の感情移入の問題も残るだろう。結局、学校史を含めて「歴史」とは何なのか。資料そのものをして語らしめる羅列方式、多数の執筆陣による事典方式、そうなると、いささか比喩的に言えば、history は確保しても story が欠落してしまわないか。歴史を専攻する者を常に悩ますこうした厳しい問いに、学校史だけが例外ではあり得ないと思われる。

最後に資料の保存と開示の問題である。校史編纂・公刊で高まった歴史意識を、不断に保持する努力の困難さは、どこでも体験していることだろう。温古知新と言おうが、「巨人の肩に乗った侏」と言おうが、絶えざる「過去の現在化」の努力が望まれる次第である。

1997年10月14日(火)　全国大学史資料協議会　1997年度全国研究会基調報告

大学史編纂と資料保存の現状

－東北大学の場合－

東北大学百年史編さん室　中　川　　学

はじめに

本報告では、まず東北大学記念資料室の設置以来の歴史とその大学内外で果たしてきた諸機能について概観する。そのうえで、1997年4月に新設された百年史編纂室の実務内容を紹介し、両者の現状と課題について述べることとしたい。

1．東北大学記念資料室の歴史とその諸機能

記念資料室が設置されたのは1963（昭和38）年、『東北大学五十年史』編纂事業が終了してから3年後のことである。原田隆吉氏の「記念資料室の発足」（『図書館学研究報告』19号、東北大学附属図書館、1986年）によると、編纂終了後の資料の散逸に危機感を抱いた事務局・図書館職員の一部から資料を保存する組織が必要との意見が寄せられ、これを契機に記念資料室設置運動がなされたという。

この記念資料という概念は「大学が自己を記念する資料」（前掲原田論文）という意味で用いられており、記念資料室設置規程には記念資料の収集・整理・保存・利用がその目的とある。資料室はこれまでいかなる活動をおこなってきたのだろうか。

資料室の設置から現在までの34年間を、活動と機能から大きく区分すると、(1)設置（附属図書館の一室）から独立移転前〈1963～85年〉、(2)移転から百年史編纂構想委員会設置前〈1986～92年〉、(3)同委員会設置以降〈1993～97年〉の3期に分けられる。

第1期は、教官関係の記念物・学内刊行物の収集、教官の著作目録・肖像写真の作成に重点を置いていた時期である。この時期の特徴としては、大学における学術情報をひとつの資料として捉え、著作目録の作成を開始していたことがあげられる。これらを全体としてみれば、顕彰的性格を志向した基盤作りの段階と位置づけることができる。

第2期は、資料保存場所の不足問題を解消するための移転がおこなわれた時期である。展示室・資料保存室あわせて1200平米という環境整備により、その後の活動は大きく展開した。この時期の特徴としては、所蔵資料目録の刊行、常設展示・企画展示会の開催、退職教官の学術研究業績のデータベース化事業等があげられる。まさに資料の公開を重視した時期といえよう。

第3期は、百年史編纂事業を視野に入れた活動に転換した時期である。この時期の特徴としては、学内行政文書の収集開始、学内外からの大学に関する照会への対応があげられる。すなわち、百年史を見越した全学的な公文書収集に重点を置くとともに、大学史に関する情報のレファレンスサービスという新たな機能を持ち始めた時期といえる。

資料室の活動を歴史的に振り返ってみた場合、そこには関係者の試行錯誤の足跡 ― 各時期ごとの課題への対応 ― をみることができる。資料室はその間口の広さゆえ、今後、いくつかの方向に展開する可能性を秘めているといえるだろう。とはいえ、資料室固有の特徴に目を向けるならば、やはり記念資料と呼ばれる資料群（御真影奉安庫など）を生かしつつ、文書資料をも重視する方向、つまり大学歴史博物館と文書館という二つの側面を兼ね備えた施設として展開してゆくのが望ま

報告する中川　学氏

しいのではないだろうか。

もちろん、そのためには乗り越えねばならない課題も山積されている。なかでも重要なのは公文書の収集システムの確立、すなわち、これまでの受動的な収集方法を変えることである。その大きなきっかけとなるのが、百年史編纂事業なのである。

2．百年史編纂事業の現状

百年史編纂事業が開始されるにあたり、なぜ記念資料室とは別に、百年史編纂室が作られたのか。

百年史編纂構想委員会（11名の教官から構成）は、まず編纂体制・編纂事業の概要をつかむため、北海道・東京・中央・名古屋・京都・九州の各大学の資（史）料室・編纂（集）室の調査をおこなった。その調査の結果、全学的支援体制・専任教官を数名配置した編纂体制が不可欠との認識が得られた。そして、新たに事務局管轄の編纂室を設置することによって、大学全体の支援が得られるとの見解が打ち出されたのである。

このようにして答申された構想案では、「創立以来の沿革」「学術的貢献」「社会的貢献」「未来への指針」を明らかにするという４つの基本編纂方針と編纂体制が明確化されるとともに、通史編３巻、資料編３巻、部局史編４巻、写真集１巻の計11巻の『東北大学百年史』刊行がうたわれたのである。

答申後、２年ほどの期間を経て、室長以下５名の室員で構成される百年史編纂室が設置された。編纂室では現在、学内・学外（文部省関係）資料の調査・整理などの活動をおこなっているが、なかでも本部事務局所蔵資料の悉皆調査に重点を置いている。それは大学史編纂のための資料調査にとどまらず、将来に向けての資料保存・利用システム構築のためには、大学という組織体、特にその中枢たる事務局全体でどのような文書群が存在しているのか、その全体像を把握する必要があるとの認識からなされているものである。

現在、事務局は非常に好意的かつ協力的であり、今後、学内における利用を前提とした整理・保存の試み（資料のマイクロ化事業も含めて）を編纂室がおこなうことによって、百年史を契機とした文書の移管システムの構築につながれば、との願望を持っている。

百年史編纂事業の過程で編纂室が収集した資料は、すべて編纂終了後、記念資料室へ移管される予定となっている。年史編纂後の文書資料の行く末、それは編纂室そして記念資料室が、いかに編纂終了後を見越した活動をしていくかに懸かっているのではないだろうか。

むすびにかえて

百年史編纂構想委員会の一員として、他大学の調査をおこなった際、各大学ごとの豊富な個性に驚いたことを記憶している。日本の大学のアーカイヴズはこれから発展して行く組織であって、それぞれの大学の歴史・文化の違いによって様々な形があってよい。もちろん、どのような形態であっても、その根底に大学アーカイヴズとしての資料に対する一定のルールがあってこそ、というのは当然のことといえるだろう。そして、そのような共通の基盤作りに不可欠なのが情報交流であり、そこに全国大学史資料協議会のひとつの存在意義があると思われる。

以上、本報告では、東北大学を事例として、記念資料とよばれる多様な資料を所蔵する記念資料室に、百年史編纂室が文書館的機能を補完するという、まさに車の両輪体制による課題の克服ができないだろうか、というささやかな提言をしたにすぎない。

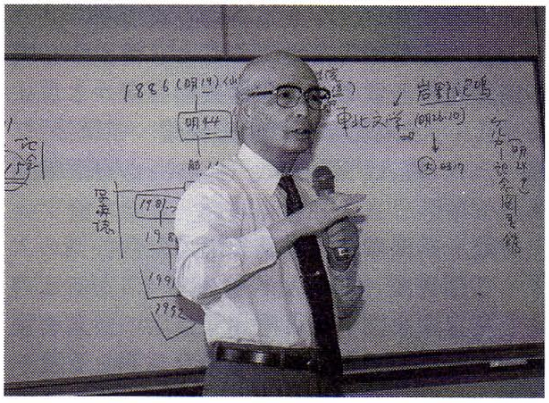
この拙い報告を通して提出した諸課題の解決に向けて、関係各機関の実務体験に基づくご教示を得られれば幸いである。

1997年10月15日(水)　全国大学史資料協議会　1997年度全国研究会講演

初期東北学院の文学者達―『各論』編をめぐって―

竹　井　一　夫

本日は、ちょっと大学史資料協議会研究会にふさわしくない、私共の初期学院の文学者、島崎藤村・岩野泡鳴・押川春浪の名をとり上げて、講演テーマにしましたが、私の予定としましては、これら一々の文学者のお話をするのではなく、『東北学院百年史』編集の中で、これら文学者の資料的実証的研究をどの様にして来たかを含めて、東北学院史資料の収集、整備の問題を申し上げたい、と言うことなのであります。



講演する竹井一夫氏

本日、皆様にお渡ししました資料は、

1．東北学院の歴史と環境を訪ねて
　― 研修バスハイク・ハンドブック ―
　（パンフレット）
　〔午後の文学散歩 ― 仙台城址・みやぎの文学碑めぐり ― を含む。〕
2．東北学院百年史　各論篇　目次
　（コピー資料）
3．東北学院大学中央図書館所蔵貴重書展示案内、並びに展示室案内図
　（現行展示のもののみ）

の3点になります。

学内には現在、東北学院史編集資料部門として、次の部門があります。

第1　「東北学院史料室」　法人本部
第2　中央図書館　大学図書館
第3　中央図書館・貴重書室　同

〔例えば、上記3の現行展示のもので古いもの、セカンドフォリオ版「シェイクスピア全集」1632年、グーテンベルク「42行聖書の原葉」1445年頃、ルターの初版本1500年代、アウグスティヌス「告白録」1475年、「天正・慶長使節ローマ法皇接見記」天正・1585年、慶長・1615年、「マグナ・カルタ」1556年、プトレマイオス「世界図」新図二版1541年。コーナーとしては、初期学院史資料、島崎藤村、ダンテ、中国語訳新約聖書。其の他カント、アダム・スミス、ダーウィン、マルサス、ホッブス、ヘルデル、ヘーゲル等。特殊なものに「ペリー総督署名入り書簡」1843年、「シュメールの粘土印章」BC 2300～2200頃等があります。〕

東北学院（仙台神学校）の創立は、1886（明治19）年で、校名を「東北学院」と改称するのは、1891（明治24）年であります。『東北学院百年史』は、1981（昭和56）年7月の編集委員会設置から10年の間に『東北学院の100年』（1986・写真集）、『東北学院百年史』通史（89）・資料（90）、各論（91）編三巻（約3000ページ）を刊行、終了しました。が、この百年史が東北学院史の唯一の修史編纂事業ではなかったのです。その間25年置きに、「二十五年史」（『東北文学』創立25周年記念号）、「五十年史」（学内資料・記録・覚書等によるノート、『東北文学』・「東北学院時報」創立50周年記念号）に類する周年史的記録、記念式典・行事はあっても、これを周年史として一巻にすることはなかったのです。それをはじめて一巻にしたのは『東北学院七十年史』（1959）でした。その4年前、創立70年記念式典を挙行しています。

〔70周年という満年でなく、数えどし年で行なっているのは、初期学院出身者が、既に高齢に達していた事と、75より70（古

稀祝）を選んだせいかとも思われます。〕

この七十年史には編集委員会なるものはなく、当時「東北学院時報」（創刊大5・1）の編集担当者（元国語教員）一人によって5年がかりで書かれたものです。資料文献名も出典も挙げることは殆どなく、流麗な文体で物語的要素に富み、その点では『東北学院七十年史』は、すぐれた読み物になっていますが、幾つかの問題点も指摘できます。出典は書いてありませんが、殆ど二十五年史、五十年史段階での学内資料と、新しい聞き書き、初期学院出身者の「思い出」等の収集により、後の百年史段階での学内・学外、ミッション資料関係等の徹底した資料収集は、何ひとつありません。従ってそこには実証的資料的な厳密な歴史記述とは異なって、寧ろ「神話化」され美化された一面があるということです。そうした点の「非神話化」が、今回の修史編纂事業の根底にあったわけです。

今、「東北学院史料室」は編集作業当時のまま、第一室・主務省関係文書を中心にしたもの、第二室・初期学院からのアルバム・写真、物件、各種マイクロフィルム史料、初期学院のミッション並に学校記録、第三室・県庁、国立公文書館等の学事文書、ミッション（1842年以降の機関誌、発行各種雑誌、年次報告、書簡等）、教会（中会記録、教会記録、教会史関係新聞、雑誌）それに初期学院の学校記録（学籍簿、教員会議録等）があります。外に法人本部には理事会記録等です。今お話し致しましたように、これら資料の収蔵場所は (1) 資料室、(2) 大学図書館、(3) 貴重書室、(4) 法人本部、(5) 高等学校資料室（ここには仙台神学校礎石、カプセル文書等、高校本来以外の学校史資料があります）と、全く異なる場所と管理の下に分散、置かれています。最初に資料室がスタートしたのは、私が宗教主任としていた高等学校で、その北校舎の階段下倉庫に、初期学院の「学籍簿」・「成績簿」（英文四冊、和文二冊）を発見したことによります。続いて「県庁文書」に東北学院・宮城学院の「学事文書」の一切があることを突きとめました。私が赴任して10年目のことでした。既に私は二本松教会牧師時代から文学（詩・小説・評論）を始め、赴任以来、藤村・泡鳴の研究〔日本近代とプロテスタンティズム〕を傍らしていたからでした。

目下、これらの収集・所蔵資料の統一的管理と整理の問題があります。これは学内問題で早急に何らかの方法を今後構ずべきだと思います。その他の問題に (2) 大学図書館（一般学生、教職員）のオープンな図書利用の中に、初期学院の英文図書・訳書で、藤村・泡鳴（春浪は勉強ぎらいでしたが）が利用、その『早春』（藤村）や『神秘的半獣主義』（泡鳴）に言及している「ケルカー記念図書館」の図書 — 明治30年（藤村教師時代）まで約2000冊 — が、次第に失われつつあることで、一部は既に (3) 貴重書室に移したものもあります。

これまで東北学院史料、それに編集上の諸問題等の歴史的経過の概略を述べて参りましたが、今、恐らくこれらの史料の所在のすべてを知っているのは、学内私一人だとすれば、残念なことになります。全史料の検索つくり、コンピューター入力、そしてこれらの情報のオープン化への可能性をさぐることこそ、かつての史料室担当者として最緊要の課題かと思います。　（元東北学院百年史編集・執筆委員
詩人・評論家、ペンネーム藤一也）

付記　講演の後、道路を隔てた向い側の大学図書館（3つ大学キャンパスがあるので、中央図書館と呼ぶ）5階の貴重書室へ移動、展示資料の簡単な説明。昼食。その後約2時間、宮城学院のスクールバスで「仙台城址・みやぎの文学碑めぐり」（魯迅・藤村・晩翠・茂吉・木俣修）を行なう。

当日は快晴のよき一日であった。

「仙台城址・みやぎの文学碑めぐり」
参加者の記念撮影

全国大学史資料協議会 1997年度総会並びに全国研究会参加報告

中央大学広報部大学史編纂課　中川　壽之・松崎　彰

はじめに

全国組織として2年目を迎えた本協議会の今年度の総会と全国研究会は、10月13日(月)から15日(水)まで3日間にわたって仙台市の東北大学金属材料研究所講堂をメイン会場に開催された。参加校は、東日本部会＝25大学、西日本部会＝19大学および10個人会員に会場校の東北大学（記念室・百年史編さん室）を合わせて、総計で45大学、87人であった。

1997年度総会・講演会

初日の10月13日に開かれた総会では、まず司会の中央大学広報部大学史編纂課松崎彰が開会を宣言し、次いで議長・副議長の選出がおこなわれ、議長に明治大学総務部歴史編纂事務室鈴木秀幸氏、副議長に龍谷大学大学史誌編纂室吉岡義信氏がそれぞれ選ばれた。続いて鈴木議長・吉岡副議長のもと議事が進められ、神奈川大学大学資料編纂室澤木武美氏（会長校）から開会の挨拶があり、また会場校を代表して東北大学百年史編さん室長今泉隆雄氏から挨拶があった。次に桃山学院学院年史委員会西口忠氏より役員会審議の報告として協議会パンフレットの製作状況について説明があり、年度内刊行が満場一致で承認された。続いて本年度の東西部会活動計画について西日本部会事務局校（関西大学事業局出版部出版課熊博毅氏）と東日本部会事務局校（中央大学松崎彰）からそれぞれ報告があった。その他、愛知大学50年史編纂事務室田崎哲郎氏から協議会として国立公文書館所蔵の戦後期文部省公文書の公開運動に取り組むよう要請があった後、鈴木議長の閉会宣言を以て総会を終了した。なお、左の要請を受けて翌14日臨時の全国役員会を開き、各部会幹事会にて検討の上、各部会長が意見をとりまとめて全国役員会の立場を表明することとした。

総会終了後、講演会が開催され、オーストラリアから招いたシドニー大学前アーキビストのケニス・スミス氏が「シドニー大学アーカイヴズ―過去、現在そして将来―」の演題で講演した。スミス氏は、まずシドニー大学が所在するオーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州のアーカイヴズの歴史に言及した。続いて1853年に開校したシドニー大学の大学アーカイヴズについて、その史料保存活動の始まり（1913年に大学連盟が連盟アーキビストの名誉職にJ.G.ブレレトンを任命）、史料保存の政策（1981年―1995年）、大学アーカイヴズのスタッフ（1954年―1997年）、記録の保存（大学管理の公式記録・著名な大学教職員の個人史料・学生のクラブや

ケニス・スミス氏の講演

協会の保管記録・いくつかの雑多な記録類と公的な印刷物）、アーカイヴズ記録の使用アクセス（30年を越える公的記録への自由なアクセス、ホームページの開設等）、大学アーカイヴズの将来（急速なコンピュータ化による記録の増大への対処、アーキビストの増員等）、の6項目にわたって詳細に説明された。講演にあたって通訳は、桃山学院の西口氏が担当された。なおスミス氏の講演については、小冊子が発行される予定である。

講演会終了後、東北大学記念資料室永田英明氏の案内で同記念資料室を見学し、その概要と展示について詳細な説明を受けた。その後、会場を東北学院同窓会館に移して研修懇親会が開かれた。はじめに、桃山学院年史委員会原登久雄氏から開会の挨拶があり、続いて東海大学資料室竹市知弘氏の乾杯の音頭、宮城学院女子大学資料室渡邊弘道氏の挨拶の

後、関西大学の熊氏の司会進行により、東西両部会の会員とケニス・スミスご夫妻との親睦が深められた。研修懇親会は、和やかなムードのなか日本大学大学史編纂室五谷十三雄氏の挨拶で閉会した。

全国研究会―基調報告・パネルディスカッション

2日目の10月14日、東北大学金属材料研究所講堂において全国研究会を開催した。はじめに、中川学氏（東北大学百年史編さん室）が「大学史編纂と資料保存の現状 ― 東北大学の場合 ― 」という演題で報告をおこなった。中川氏は、まず東北大学記念資料室の歴史とその大学内外で果してきた諸機能について概観された。具体的には、記念資料室が設置された1963（昭和38）年から現在に至るまでの期間を3期に区分し、各期の組織や運営について記念資料室設置規程・同資料収集規程・同利用規則にもとづいて詳細に説明された。次に記念資料室の現状について、その業務内容を(1)資料の収集・整理・保存、(2)その公開・展示、(3)教官の著作目録作成・肖像写真作成、(4)レファレンスサービスの4点に分類して、大学歴史博物館的機能と文書館的機能の2つの側面をどう展開させて行くかが、今後の課題であると指摘された。次いで東北大学百年史編纂事業の現状をめぐって、百年史編纂構想委員会や編纂構想案など事業の経過をはじめ、現在の編纂体制の構成（百年史編さん委員会 ― 編集委員会 ― 百年史編さん室）および業務内容（事務局資料の悉皆調査、文部省関係・名誉教授など学外調査、聞き取り調査、資料のマイクロ化事業等）について言及され、記念資料室と百年史編さん室の相互補完機能によって東北大学の百年史編纂と資料保存に取り組んでいくことが必要であると強調された。

中川報告に続いて、出村彰氏（東北学院大学副学長）が「学校史編纂の課題と目標」という演題で報告をおこなった。出村氏は『東北学院百年史』編纂に関わられた立場から、まず先行の年史である『東北学院七十年史』の特色（文体流麗）と問題点（資料典拠欠如・資料散逸）に触れられ、百年史編纂にあたっては全学的な規模で資料提供を求めたことや編集委員会に一任して編纂事業を進めていったことを説明された。次に資料収集について、学内資料が戦災による焼失や散逸によって大幅に限定されたため海外資料に着目して米国において創立に関わる宣教師関係資料を収集したことに言及された。また年史の時代区分について、各時代を象徴する言葉を表題に付けて読みやすさに配慮したことや叙述の視座として「建学の精神」（キリスト教）と日本との相関性に留意した点などを強調された。そして年史編纂の反省点として(1)分量、(2)読みやすさと史的厳密さ、(3)客観性と感情移入の相剋、(4)読者層の想定の困難さ、(5)多数執筆者編纂と内容の連続性などの問題点を指摘され、また年史編纂の過程で収集された資料の保存、展示による資料の活用、専任職員の育成、さらに自らの大学に対する「歴史意識」昂揚の不断の努力の必要性を説かれた。

午後から開かれたパネルディスカッションの統一テーマは、「大学史編纂をめぐる諸問題」で、これにもとづいて3本の報告があった。

最初に大乗淑徳学園の三好一成氏が、同学園の百年史編纂刊行事業について報告した。大乗淑徳学園は1992年に創立100周年を迎えたが、その際前後10年間を費やして『大乗淑徳学園100周年記念写真集』（写真集編集委員会、平成8年6月刊）と『学校法人大乗

報告者・三好一成氏

淑徳学園 ― ○○年史　資料編』（資料編委員会、平成8年11月刊）を刊行した。このうち『学校法人大乗淑徳学園 ― ○○年史　資料編』では、同学園の基礎となった戦前の2つの法人の合併をめぐる経緯や戦後の幼稚園から大学までの一貫教育をめざした総合学園構想の具体的な歩みを記録として示すことができた点を、その特徴として強調された。次に資料編の構成について、通史的内容を盛り込む必要から各学校の沿革・略史を掲載した点、大

学から幼稚園までの個々の歴史を共通の枠組みでとらえられるよう資料の分類・配列に工夫をこらした点などの説明があった。また収集資料については、現在同学園ではマイクロフィルムによる保存と検索目録の作成がおこなわれているが、将来コンピュータを活用することにより資料の保存・整理を進めていくことで、年史編纂に関わる組織が大学の資料情報の発信・受信基地としての役割を果していくのではないかとの展望を示した。

第2報告は、国士舘大学の佐藤芳郎氏が、創立80周年記念誌（写真集）編纂について発表した。今回刊行される写真集は法人刊行の最初のもので、創立80周年記念事業運営委員会のもとに作業部会が設けられて編集業務が進められたことなど写真集の編纂経緯を「記念誌編集要綱」・『国士舘80年の歩み』台割帳にもとづいて詳細に説明された。特に写真の選定については、使用点数や選定方法、新聞社などの写真版権使用上の留意点について具体的に言及され、さらに製作部数とその経費についても実務に携わられている立場から詳しく報告された。

報告者・佐藤芳郎氏

第3報告は、関西学院の川崎啓一氏が、同学院の百年史編纂と資料編について報告した。川崎氏は、まず創立百周年（1989年）に際して記念出版された図録「関西学院の100年」の刊行経緯・組織を概観した上で、百年史の組織（委員会・編纂体制）・基本方針・構成と刊行スケジュールおよびその経過を詳細に説明された。次いで関西学院ではじめて編纂された資料編について、その編集方針・構成と体勢の概要を解説し、外部業者との共同編集作業について具体的に説明された。その上で、現在関西学院で進められている総合コース「日本の近代化と関西学院」講義開講、資料編刊行（資料の活字化）の継続、資料館・大学博物館への展望、紀要の復刊など多岐にわたる活動の実態を紹介され、関西学院の歴史を研究する素地づくり、また大学史研究の拠点となるべき組織をめざしている点を強調された。

報告者・川崎啓一氏

報告終了後、関西大学の熊氏と中央大学の松崎を司会に、また同大学史編纂課の中川壽之を書記としてパネルディスカッションに移る予定であったが、3氏の熱心な報告による大幅な時間超過のため予定を変更し、早稲田大学大学史編集所の金子宏二氏と佐藤能丸氏にコメントをお願いすることとした。はじめに金子氏は、『早稲田大学百年史』（全8巻）完結を受けて、今後同校大学史編集所の役割が年史の編集から資料の収集・整理・保存へと移行し、さらに資料のデータベース化による適格な情報の学内外への発信源としての機能を求められるのではないかと指摘し、現在早稲田大学で進められている美術史・考古学・大学史の3部門からなる博物館開設（98年5月）の動向についてその概要を紹介された。次いで佐藤氏からは、早稲田大学百年史の編集について稿本から定本への2段階・27年間を経て百年史（通史編5巻、学部・附属機関史2巻、総索引・年表別巻1巻）が完成に至ったとの説明があり、近年の年史の編纂状況が「慶祝型」から「課題設定型」に明らかに変わりつつある中で、年史編纂後の今日的な問題として大学そのものが研究対象とされる現状に対応して資料をどう提供していくかが、現実に直面する課題であると強調された。

東北学院大学中央図書館貴重書庫の見学

最終日の10月15日は、施設見学として東北学院大学中央図書館貴重書庫を訪れた。午前中、はじめに竹井一夫氏（詩人・評論家、元東北学院資料室）から同校の沿革や百年史編纂の経緯、所蔵史料の保存と展示の概要をうか

がった後、中央図書館貴重書庫の展示を見学した。その後、午後からは仙台市博物館から青葉城周辺および東北大学を巡るバスハイクをおこない、全国研究会の全日程を終了した。

むすび

今年度、本協議会は初の試みとしてオーストラリアから大学アーキビストのケニス・スミス氏を招いて講演会を開催した。シドニー大学で長年アーカイヴズに従事してこられたスミス氏の講演は、日本において大学の資料保存・利用運動に取り組んでいる東西両部会の会員にとってたいへん興味深く有意義な内容であったといえる。

また全国研究会では、記念資料室と百年史編さん室の両輪体制により年史編纂事業と資料保存に取り組んでいる東北大学、百年史編纂後の資料保存のさまざまな問題を提起した東北学院大学、幼稚園から大学に至る総合学園の年史編集から資料保存問題を展望した大乗淑徳学園、当面している写真集編纂の実務を具体的に紹介した国士舘大学、百年史編纂を経て史料館・大学研究の拠点作りを目指す関西学院、いずれの報告も今回の統一テーマ「大学史編纂をめぐる諸問題」に沿った充実した内容であった。

上記の諸報告からも明らかなように、年史編纂と資料保存をめぐる問題は、両者不可分の関係にあることが前年に引続いて再度確認された。年史編纂を終えた大学も、その途上にある大学も一様に収集資料の整理・保存からそれを情報として提供しうるまでの体制の構築が今日的な課題として提起されていることを改めて認識した研究会であった。

最後に、本年度の総会・全国研究会開催にあたって会場校をお引き受けくださった東北大学百年史編さん室長今泉隆雄氏、同百年史編さん室の中川学氏、高橋禎雄氏、東北大学記念資料室の永田英明氏、高橋早苗氏をはじめ見学場所や研修懇親会の会場設定など煩わしい準備作業の労をお取りくださった東北学院の出村彰氏、宮村光一氏、高山幹雄氏、竹井一夫氏、宮城学院女子大学の渡邉弘道氏、伊勢文夫氏、島貫孝雄氏ならびに運営全般にわたってご協力くださった各位に心からお礼申し上げます。

〈参加者一覧〉

＊〈東日本部会〉

愛知大学	
50年史編纂事務室	田崎　哲郎
学習院大学	
学習院大学史料館	桑尾光太郎
神奈川大学	
大学資料編纂室	澤木　武美
	入谷　秀夫
慶應義塾大学	
福澤研究センター	東田　全義
国際基督教大学	
編年史室	須田ますみ
国士舘大学	
国士舘資料室	佐藤　芳郎
実践女子大学	
記念事業事務室	城田　秀雄
専修大学	
年史資料室	内山　宏
拓殖大学	
創立百周年記念事務室	国松　重雄
玉川大学	
教育博物館学園史料室	潟山　皓一
	田後　政子
大乗淑徳学園	
長谷川仏教文化研究所	三好　一成
中央大学	
広報部大学史編纂課	村松　良人
	松崎　彰
	中川　壽之
津田塾大学	
企画広報課	丸山　昌子
東海大学	
資料室	竹市　知弘
	名本　光男
東京農業大学	
図書館	杉本　秀健
東北学院	
広報室	宮村　光一
	高山　幹雄
	出村　彰
	竹井　一夫
東洋大学	
井上円了記念学術センター	三浦　節夫
	山田　一宇
	豊田　徳子

日本女子大学
　成瀬記念館　秋山　倶子
日本大学
　大学史編纂室　五谷十三雄
　　柏村　哲博
法政大学
　総務部広報・広聴課　内藤　　栄
宮城学院女子大学
　宮城学院資料室　渡邉　弘道
　　伊勢　文夫
　　島貫　孝雄
武蔵野美術大学
　大学史史料室　渡辺　博志
　　高田　知美
明治大学
　総務部歴史編纂事務室　鈴木　秀幸
立教大学
　図書館大学史資料室　最上　　登
早稲田大学
　大学史編集所　金子　宏二
　　佐藤　能丸

〈個人会員〉
上田敍代（学習院女子短期大学短大史編纂室）
小池聖一（広島大学総合科学部）
建田人成（東京音楽大学）
寺崎弘康（神奈川県立歴史博物館）
戸部和夫（株式会社ニチマイ）
中野　実（東京大学史史料室）
日露野好章（東海大学課程資格教育センター）
神谷　智（名古屋大学史資料室）
山口拓史（名古屋大学史資料室）

＊〈西日本部会〉
大阪音楽大学
　校史史料室　橋口　武仁
大阪国際学園
　広報室　藤江　宗一
大谷大学
　真宗総合研究所　武田　武磨
　　宮崎　健司
　　御手洗隆明
追手門学院大学
　庶務部企画係　西出勝三郎
関西大学
　事業局出版部出版課　熊　　博毅
関西学院
　学院史資料室　川崎　啓一
　　辻　美己子
　　岩田　好美
甲南学園
　広報室・学園史資料室　田中　　享
　　岡明　一幸
神戸女学院
　史料室　上野　輝将
　　若山　晴子
　　佐伯裕加恵
神戸山手学園
　学園史編纂委員会事務局　松井　文夫
西南学院大学
　広報課　山田　能久
谷岡学園
　広報課　新井　芳則
　　矢野　治彦
同志社大学
　同志社社史資料室　嶋田喜一郎
　　中西　清和
同志社女子大学
　史料室　宮川　成雄
南山学園
　学園史料室　永井　英治
梅花学園
　総務部資料室　遠藤　トモ
佛教大学
　広報調査課　大河内良治
桃山学院
　学院年史委員会　西口　　忠
　　原　登久男
立命館
　百年史編纂室　西川　　賢
　　秋房　麻理
龍谷大学
　大学史誌編纂室　明石　恵實
　　吉岡　義信

〈個人会員〉
折田悦郎（九州大学大学史料室）

＊〈会場校〉
東北大学
　記念資料室　永田　英明
　　高橋　早苗
東北大学
　百年史編さん室　今泉　隆雄
　　中川　　学
　　高橋　禎雄

1998年1月22日(水)　研究部会・講演会

戦後私立大学政策研究の課題と史料

東洋英和女学院大学教授　土　持　法　一

講演する土持先生

はじめに

1）戦後教育改革とは何だったのか

戦後教育史のなかには「虚」と「実」が混在している。そして、いつの間にか「俗論」が「正論」となっているものもある。たとえば、「押しつけ憲法」にはじまり、学校制度の六・三制の「押しつけ」論がそうである。これは、戦後日本の教育を同じ敗戦国ドイツと比較して、「ドイツ政府がアメリカ教育使節団の強制を排し、あくまで伝統ある自国の学制を維持したのに反し、日本の教育関係者はアメリカの圧迫に屈して六・三制を採用した」などと批判されてきたからである。しかし、本当に日本人には主体性がなく、一方的に「押しつけ」られてしまったのだろうか。米国国立公文書館などの一次史料に基づけば、それはあまり根拠のないことで、結論からいえば、日本側は「ポツダム宣言」の限界を看破して、占領というモメンタムをうまく利用して、戦前からの改革案を抜本的に遂行した画期的なものであったといえる。

2）占領軍による三つの民主化政策

マッカーサーは戦後日本を民主化するための基本的な政策を打ち出し、その成果を計るために、以下の三つを「バロメーター」とした。

(1) 私立大学の促進

承知のように、新制大学のスタートは正式には1949年度であるが、これは国・公立大学であって、私立大学は「別途」扱いとされ、いくつかの私立大学は事実上、1948年にスタートした。ＧＨＱ側は新制大学の開始を1948年と位置づけている。すなわち、戦後の高等教育改革は私立大学に重点が置かれていたことがわかる。たとえば、12の大学は1948年から開始された。そのうち１校は公立であったが、他の11校はすべて私立大学で、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学、国学院大学、上智大学、聖心女子大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学、神戸女学院大学であった。すなわち、その特徴としては女子大学と宗教系大学が多いことがわかる。一方、国立大学は１府県１大学というように縮小された。

さらに、六・三制の学校制度の導入に関しても、『米国教育使節団報告書』では、「租税」で管理されている公立学校を意図したのであって、私立学校には「自由」が認められていたのである。それにもかかわらず、当時は間接統治下であったために、日本政府は「平等」という美名の下において、国・公・私立の学校を画一的に六・三制にしてしまったという経緯がある。私立学校は英語では一般的に「インディペンデント（独立）・スクール」と呼ばれ、政府から独立したものであり、そこにはアメリカにおいて見られるように、学問の自由な精神が貫徹されていたと思われる。そのような私立学校においてこそ、はじめてリベラルなものの考え方が育つと考えたのである。すなわち、ＧＨＱは私立学校に戦後における民主的改革の役割を期待していたのである。

(2) キリスト教化

マッカーサーには自ら『日本国憲法』第20条「信教の自由」を規定しながら、逆に、キリスト教を偏重するという「矛盾」する側面があった。『天皇がバイブルを読んだ日』という著書には、マッカーサーは戦前の「国家神道」に代わって、キリスト教を国家レベルで普及しようと考えていたようである。また、袖井林二郎『マッカーサーの二千日』の著書のなかには興味あるエピソードが紹介されている。マッカーサーはＧＨＱ民間情報教育局（ＣＩ＆Ｅ）にメモをよこして、「戦前

と戦後における日本のキリスト教信者の数を知らせよ」と命令した。宗教課のニコラスの調査では、戦前に20万、今は２万ということだった。ニューゼント局長は、「これでは足りない」と調査結果を突き返した。怒り狂ったニコラスは、ゼロをいくつかつけ加えて提出したという。果せるかな、２、３週間経って、マッカーサーはスピーチのなかで「民主主義は日本の国中に広まっている。キリスト教は日本の国中に広まっている。戦前は20万しかいなかったキリスト教徒が、今や２千万もいるのだ」と演説したという。

(3) 女子教育の促進

ＧＨＱから出された最も早い指令「五大改革指令」（1945年10月11日）の最初に掲げられたのが、「婦人解放」で、その後に「労働組合の助長」「教育の民主化」などと続くように、戦前への「反動化」が顕著であった。たとえば、『教育基本法』（1947年3月31日法律第25号）では、当初は「男女共学」ではなく、「女子教育」として検討されていた。しかも、「男女共学」と規定されながら、女子大学のみが存在するという偏重さも見られた。

３）『新制大学の誕生 ― 戦後私立大学政策の展開』（玉川大学出版部、1996年）の執筆動機

(1)『米国教育使節団の研究』（玉川大学出版部、1991年）との関連性

本書では、主に六・三・三制が中心であった。なぜなら、戦後教育の「聖典」と称されるこの『米国教育使節団報告書』では、戦後の高等教育をどのように再編成するか、何ら具体的に勧告されていなかった。また、戦後の高等教育改革に関する研究は、「タブー」視され、これまで十分に究明されてこなかったという経緯がある。戦後教育改革を推進した高等教育関係者等は初等・中等教育改革には全面的に協力したが、自らの改革に対してはその「利害関係」も絡み、その抜本的な改革には「消極的」であったといわれる。また、同時にＧＨＱ／ＣＩ＆Ｅ側も国民の義務教育の普及に重点を置いていた。

(2) 戦後教育改革の総合的研究 ― 六・三・三制との関連性

『学校教育法』（1947年３月31日法律第26号）では、戦後の学校制度を六・三・三・四制と決定した。学校制度を総合的に考えるうえで、４年制大学は不可欠である。そして、４年制大学は法律上では1947年に決定され、その後に具体的に展開することになり、必ずしも、計画的であったとは言えない。

(3) 元ＧＨＱ民間情報教育局教育課長オアの下での在外研究の成果

1995年に在外研究として、当時の教育改革の重要な役割を担っていたオアの所属する南フロリダ大学で、とくに高等教育改革に焦点を当てて調査・研究を行った。その結果、戦後日本の教育改革、とくに高等教育改革には、東京帝国大学総長で、日本側教育家委員長、さらに後に、教育刷新委員会委員長となった南原繁が深く関与していたことが判明した。この点に関しては『ＵＰ』（東京大学出版部）（1996年２月号）の「南原繁と戦後教育改革」に詳細に述べている。

(4) 日本国憲法第89条と私立大学への助成問題 ― 憲法草案者ケーディスへのインタビュー証言

戦後私立大学を論じる時に、重要になるのが『日本国憲法』第89条の解釈の問題である。当時、マッカーサーの下で憲法起草の中心的人物であったＧＨＱ民政局のケーディスに1995年４月に単独インタビューした。ケーディスは1996年６月18日、90歳で死去された。

新制大学 ― その史料的視点から ―

１）ＧＨＱ側の史料 ― 本研究は、これまでの先行研究、とくにその代表的な東京大学の『戦後教育改革』シリーズの成果を、アメリカ側の史料を使用して、「占領した側」に立脚して考察したもので、「アメリカ的な研究方法」にもとづいたものではないかと位置づけている。すなわち、歴史の生き証人である当事者に直接にインタビュー証言してもらい、その事実関係を一次史料で裏づけるという方法である。

２）日本側の史料 ― 私立大学政策関係で最も重要な史料は、1946年から1952年までの被占領期を通じて設置され、戦後教育改革諸政策の立案に中心的な役割を果たした「教育刷新委員会（審議会）」の議事速記録であろう。これは戦後の高等教育改革を研究するうえで不可欠な史料である。なぜなら、六・三・三制の学校制度の改革と異なり、高等教育改革

の真相は秘密のベールに包まれた謎が多く、さらに、米国教育使節団は旧制高等教育機関の再編および4年制大学を具体的に勧告しなかった。しかも、ＧＨＱ側は必ずしも高等教育改革に積極的ではなかった。そのことからも日本側の史料は重要である。個人的には、戦後日本の高等教育改革は「自主的な改革」であるとの視点に立っているので、議事速記録の公開によって、この分野の研究が飛躍的にのびるものと期待している。現在、この議事速記録は刊行されているが、当時はまだ非公開であったため、文部省官房総務課に記録として保存されているものを、監視の下で筆写し、必要最小限のものしか引用できなかった。

3）トレーナーの証言

拙著の付録の「トレーナー回顧録」のなかで、「四年制高等教育制度は、日本が受け入れるよう要求されていなかった教育改革まで巻き込んだ。占領軍は決して、このことを要請したり、押しつけたりしたことはなく、いかなる時にも、そのような態度を取ったことはなかった。また、米国教育使節団もそのような制度を好む傾向を表明したことはなかった。この決定の結果として、日本の教育制度で、最大の『崩壊』が生じたのは高等教育であった」と述べ、戦後高等教育がその出発点において問題があったことが指摘されていて、注目されている。

日本国憲法と私立大学

1）憲法第89条「公の支配」の解釈

―民間情報教育局と経済科学局の相違

(1)『報告書』「官公私立学校の地位」

―私学助成の肯定論

憲法第89条の規定によって、私学助成はきびしく統制された。私学助成への途を最初に示唆したのは1946年3月に来日した米国教育使節団の『報告書』で、その「高等教育」の章「官公私立学校の地位」で、「一部の私立学校における宗教教育を除いては、官公私立の学校間になんら本質的な相違は存在しない。授業料から得られる資金以上に、ある種の財政的支援が与えられなくてはならぬ、たとえば個人とか個人の団体とか公の資金等からくる補助金がそれである」と勧告している。これはワシントン・カトリック大学事務局長のディフェラリー使節団員が起草した。

(2) 米国学術顧問団『報告書』

―私学助成の否定論

ＧＨＱの内部機構は日本政府に対応したもので、文部省に対応した民間情報教育局に対して、大蔵省に対応した経済科学局があり、強い権力を有していた。経済科学局は独自に1947年8月に米国学術顧問団を招聘した。その報告書『日本における科学と技術の再編成』の「大学教育について」の章の「私立大学」の項では「我々は私立大学が公的資金からの援助を避けることを希望している」と明確に述べ、公的な助成金から独立することで、学問の自由が維持できるとの見解を示した。すなわち、憲法第89条の条項に即した解釈であった。これは当時のアメリカにおける私立大学のあり方を反映したものでもあった。実は、1946年7月トルーマン大統領は「高等教育に関する大統領委員会」を設置、その報告書『アメリカ民主主義高等教育』が1947年に提出されている。委員会の最終意見は、「政府が公共資金を私立の教育機関の一般的援助に向けることは私立学校の自由を破壊するおそれがある。... 従って私立学校に対する経常的教育活動の援助等は行うべきない」としている。しかし、この『報告書』には「反対意見」が添付されている点で注目に値する。この「反対意見」では、経常的教育活動に対する連邦資金が公立教育機関にのみ与えられるとの考えは、公共資金を受ける資格の基準が「公共に対する奉仕」よりも、むしろ「公の監督」にあるべきだとの考えにもとづくものであると反論している。すなわち、公的資金の援助を受ける資格の基準は「公共に対する奉仕」であって、「公の統制」ではないとの見解を打ち出している。この「反対意見」をまとめたのが、実は、米国教育使節団で来日した全米カソリック教育協会委員長のホッホワルト団員であったことから、日本における私学助成を考えるうえでもきわめて示唆に富むものであるといわねばならない。この点の詳細については、拙稿「憲法第89条と私立大学の助成問題に関する一考察」『大学論集』第26集（1997年3月）を参照してもらいたい。

2）『私立学校法』の制定過程

―安嶋彌の証言

当時、文部省において『私立学校法』の制

定に参画した安嶋彌への単独インタビュー証言にもとづいて、どのような経緯で『私立学校法』が制定されたかを調べた。

安嶋によれば、1949年当時の憲法解釈では補助金は「違憲」であるとされていたという。私学助成はまったくだめかというとそうではなくて、長期低利の融資は良いであろうとの考えであったという。1975年に「私立学校振興助成法」が制定された時に、これが憲法第89条に抵触しないかどうか、議論すべきであったが、当時の文部省および自民党は、まあいいではないかという趨勢であったと証言している。すなわち、「私学助成」は厳密には「違憲」であるとしている。助成するのなら、憲法第89条を改正する必要がある。今では、自民党も共産党もこれを「違憲」だとはいわない。これは「解釈改憲」というもので、法治国家として問題であると厳しく批判している。

課題と展望

1）新制大学の理念は何だったのか
　―リベラル・アーツ精神の欠如

結論からいえば、新制大学の「理念」である「一般教育」が十分に貫徹されなかった。なぜなら、戦後教育改革は戦前の複線型の解消による制度的改革が先行したものであったからである。この点に関しての詳細は、拙稿「新制大学における『一般教育』の導入と展開過程」『日本の教育史学』第40集（1997年10月）を参照してもらいたい。リベラル・アーツといわれる民主的教育は「成熟社会」において萌芽するもので、敗戦直後の困窮した日本の社会状況では考え難いことであった。1991年７月の文部省の大学設置基準の大綱化によって、その真価が問われはじめている。

2）新制大学における「一般教育」とは何だったのか―「一般教育」の再考

これまでの「一般教育」は専門教育の予備的なものと考えられてきたと思われる。なぜなら、戦前の旧制大学はエリートで、入学はきびしく選抜された。しかも、大学は専門を学ぶ機関として位置づけられ、その予備的な知識は、旧制高校で準備されていた。このような大学の伝統をもつ日本社会では、「一般教育」の意義は到底理解しがたいものであった。ところが、戦後日本の「一般教育」の理念はアメリカの大学における「大衆化」に対応したものであった。それは、日本における大学が大衆化されたいまこそ意義があると思われる。しかし、その一般教育も「解体」されてしまった。旧制の大学での専門教育は、むしろ大学院でなされるはずであった。すなわち、新制大学と大学院は「両輪」で、その機能を果たすべきであった。

基本的史料の紹介とオーラルヒストリー

1）『戦後日本教育改革在米史料集成』（第２巻）

この史料集成は第一巻の公的な基幹文書に続く、私家（個人）文書で、とくに米国教育使節団関係の史料を中心としたものである。また、戦後教育改革研究の宝庫といわれる「トレーナー文書」（66巻）のなかから史料を厳選した。とくに、多くの高等教育関係の史料を選別した。このなかには「イールズ文書」などＧＨＱ／ＣＩ＆Ｅ教育課高等教育関係者の史料が多く含まれている。

2）『戦後ドイツ教育改革在米史料集成』

これは『戦後日本教育改革在米史料集成』の姉妹篇として編纂されたもので、ドイツの戦後教育改革の原史料を国立公文書館で収集したものである。戦後日本とドイツを比較することで、歴史研究の客観性を高めることができる。

3）オーラルヒストリーの日米比較

「歴史はドラマ」であり、当事者の証言は歴史研究の醍醐味である。しかし、日本ではオーラルヒストリーの評価が必ずしも高くないようである。昨年10月に発足した政策研究大学院大学の創設記念シンポジウム「オーラルヒストリーと政策研究」が11月に開かれた〔詳細は『読売新聞』1997年11月６日付参照〕。そこでは、この分野が米国に比べていかに立ち遅れているかの現状が指摘されている。

コロンビア大学バットラー図書館にある歴史証言調査計画のなかに膨大なインタビュー記録が保存されていて、内外からの研究者に幅広く利用されている。このインタビュー記録のテープはほとんどが文章化されている。たとえば、興味ある史料のひとつに当時ＣＩ＆Ｅ教育課の初代課長であったヘンダーソンのインタビュー記録のなかには、彼が1946年元旦の天皇の「人間宣言」の草案を準備したことが興味深く証言されている。

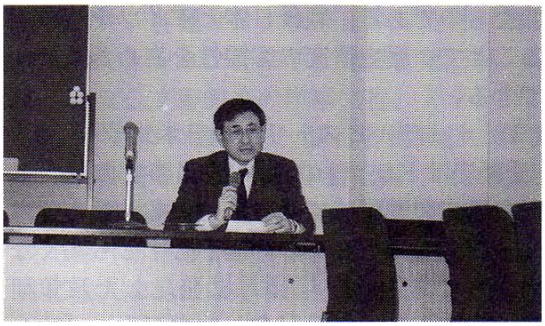
1997年11月26日(水)　研究部会報告

日本大学における創立百周年記念事業と記念出版物について

日本大学大学史編纂室　柏　村　哲　博

1．日本大学の歩み

日本大学は明治22年（1889）10月４日、時の司法大臣山田顕義の主唱のもとに宮崎道三郎（東京帝国大学教授）ら11人が発起人となって「日本法律学校」として創立され、初代校長には金子堅太郎が就任した。明治36年名称を「日本大学」と改め、翌37年３月、「専門学校令」に依拠する大学として認可された。大正９年（1920）４月、「大学令」にもとづく大学に昇格、学長は松岡康毅（初代総長）。その後、関東大震災・大東亜戦争という多難な時代を経て、昭和24年（1949）３月、「学校教育法」に拠る新制大学として発足、平成元年（1989）10月を以て創立百周年を迎え、今日に至っている。



報告する柏村哲博氏

2．創立百周年記念事業

昭和58年（1983）12月、日本大学創立百周年記念事業準備委員会（鵜沢義行委員長以下32人）が発足し、総長・理事長から記念事業に関する企画、並びに組織の大綱について諮問、翌59年６月、鵜沢準備委員会委員長より答申が出され、同準備委員会は解散して同年12月、新たに日本大学創立百周年記念事業委員会（会長・高梨公之総長、委員長・柴田勝治理事長以下627人）が発足、同時に事務室も開設されて具体的な諸事業の計画が立案・推進された。

実施に移された諸事業は次の通りである。

○寄付金の募集　　募金実行委員会を組織、昭和62年６月から募金開始、募金期間５か年間、目標額100億円。

○記念式典及び祝賀会　　平成元年10月４日、天皇・皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、品川プリンスホテルで挙行。

○「発祥記念碑」の建立　　東京飯田橋の日本医大第一病院前。

○学術情報センターの建設　　埼玉県所沢市の芸術学部隣接地に総工費約35億円で建設、平成６年４月より運営開始。

○学祖山田顕義の顕彰　　学祖終焉の地（兵庫県生野町）に記念碑を建立。東京護国寺の墓所の改修・整備。

○留学生に対する奨学基金の設定　　総額20億円の留学生を対象とする奨学基金を設定。

○記録映画製作と芝居の上演　　記録映画「日大燃える100年」（芸術学部）の製作及び歌舞伎座での芝居（市川団十郎主演「孤松は語らず」）の上演。

○功労者表彰、物故者慰霊祭の執行。

○学術講演会・国際シンポジュウムの開催。

○「日本大学百年史」（全５巻）、「山田伯爵家文書」（全８冊）、写真集「日本大学百年」（１冊）、「日本大学百年史年表」（１冊）等の出版物刊行。

○その他、国際記念会館や総合グランドの建設計画が進められたが、現時点では未着工である。

3．大学史編纂室が担当した記念出版物

○「山田伯爵家文書」全８冊（本文７冊、総目録１冊）

山田伯爵家文書については、昭和58年にその写本の所在を確認。元来、同文書の原本は山田家が所有していたが、昭和20年に麻布笄町にあった邸宅が空襲で焼失した際に、これら関係文書も一緒に焼失したものと考えられる。しかし、

これより以前大正14年（1925）に宮内省臨時帝室編集局が「明治天皇紀」編纂のための史料として借り上げ、渡辺幾治郎氏らに依嘱して筆写した写本が宮内庁書陵部に保管されている。

同書の編纂に当っては、この筆写本を底本とした。しかし、当初は国学院大学図書館より提供していただいた同筆写本のマイクロフィルムをもとにして、昭和59年より翻刻を始め、平成３年までに16冊の稿本にまとめた（限定100部、学内研究用）。この間、記念事業の一環として同書の公刊が決定したため、平成２年７月、宮内庁の許可を得て公刊用の定本作成にかかった。稿本作成の段階ではマイクロフィルムをもとにしたため不鮮明な箇所も多く、誤字や空字が避けられなかったため、定本作成にあたっては宮内庁書陵部の梶田明宏氏ら専門官数名の御協力を得て書陵部蔵の筆写本との照合を行ない、できるだけ厳密な校訂を施した。

平成３年６月に第１冊を刊行、平成４年９月までに総目録１冊を含む全８冊の刊行を終了した。Ａ５判、総頁数本文2,606頁。

なお、1,000セットを刊行し、内300セットを新人物往来社を取扱い出版社に指定して市販した。

○「日本大学百年史」第一巻の刊行

日本大学における先行年史としては、昭和10年代に50年史の刊行が計画され、ガリ版刷りの稿本が作成されたが公刊には至らなかった。その後昭和34年に「日本大学七十年略史」全１冊を刊行、同57年「日本大学九十年史」上下２冊及び年表１冊を刊行している。

百年史の編纂にあたっては、昭和63年（1988）５月に日本大学百年史編纂委員会が設置され、翌平成元年１月に実際の執筆・編纂にあたるための専門部会が組織されて編纂理念の構築から始め、平成２年度から逐次執筆にかかった。

平成５年夏、第一巻の稿本３冊が纏まり、理事者の供覧に付された。しかし、理事者から創立者の扱いをめぐって疑問点が出され、そのため数度の加筆・修正を重ねることになった。疑問点とは従来の本学の年史及び関係出版物が山田顕義を創立者として扱っていたのに対し、今回の稿本では宮崎道三郎等11名を創立者として明確に位置づけた点にあり、加筆・修正に当っては山田顕義を学祖として位置づけ、その経歴や思想・日本法律学校創立へのかかわりについて加筆することにより、学祖山田と宮崎等創立者との立場を明確にした。

当初、編纂委員会専門部会の主導で編纂が進められていたが、修正の必要が生じ修正作業に入ると、その後会議は頻繁に開かれるものの実際の作業はなかなか進捗せず結果を得るに至らなかった。

そこで平成８年初め頃から大学史編纂室主導の体制で作業を進め、訂正版の仮綴じ原稿本を作成した上、理事者の供覧に付し、その了解を得て刊行をめざした。この結果、平成９年３月末に第一巻の刊行をみることができた。

なお、同巻では日本法律学校の創立から大正９年に大学令によって大学に昇格する直前までを扱った。Ａ５判、グラビア12頁、本文1,015頁。発行部数1,500部。

○「日本大学百年史」第二巻以降の編纂

百年史通史第二巻の編纂作業は平成９年度から始まり、歴史及び教育史の専門家13名による分担執筆で、従来のような専門部会制ではなく、逐次執筆者による会合をもって内容の調整等を行ないながら執筆作業を進めている。内容的には大正９年の大学令による昇格から昭和20年末迄を扱い、平成11年５月迄に刊行の予定である。

通史第三巻は昭和21年から平成元年の創立百周年迄を扱い、平成12年５月に刊行を予定している。第四巻は資料編、第五巻は年表・索引となる予定である。

○その他の記念出版物

その他大学史編纂室で扱った記念出版物としては「日本大学百年史年表」（Ａ５判変型、324頁、7,000部、平成元年10月）、「日本大学学園歌集」（Ａ５判変型、128頁、500部、平成元年４月）、「日本法律学校の淵源とその周辺の人々」（Ａ５判、107

頁、500部、平成２年６月）のほか、広報部との共同執筆（編集広報部）による写真集「日本大学百年」（Ａ４判、192頁、14,000部、ダイジェスト版110,000部、平成元年10月）がある。

４．大学史編纂室の今後の課題

大学史編纂室では現在百年史編纂のための史資料の収集に努力しているが、こうして収集された史資料も編纂が終了してしまえば、その重要性を失い散逸してしまうことが多い。そこで今後の課題としては、収集した史資料や写真等を系統的に整理・保存してゆくことが重要であろうし、新たな史資料の発掘・収集も必要である。こうしたことから、史資料の収集・整理・保管・展示・研究者等への閲覧サービス、そして集められた史資料の検証とそれに基づく研究の場として、恒久的施設としての史料館の設置が必要であろうと考える。

全国大学史資料協議会

1997年度総会議事録（抄）

日　時　1997年10月13日(月)　15時～15時30分
場　所　東北大学　金属材料研究所　講堂
出席校　西日本部会　19大学（31人）
　　1 個人会員
　　東日本部会　25大学（41人）
　　9 個人会員
開　会　司　会　中央大学　松崎　彰氏
開会の挨拶　会長校　神奈川大学
　　澤木　武美氏
会場校挨拶　会場校代表　東北大学
　　百年史編さん室長 今泉 隆雄氏
議長の選出
　　議　長　明治大学　鈴木　秀幸氏
　　副議長　龍谷大学　吉岡　義信氏
議　事　(1) 全国大学史資料協議会
　　役員会報告（承認）
　　(2) 1997年度部会事業計画報告
　　（報告事項）
　　(3) その他
閉会の挨拶　事務局校　中央大学
　　村松　良人氏
講演会　講演者　ケニス・スミス氏（オーストラリア、シドニー大学前アーキビスト）
　　演　題「シドニー大学アーカイヴズ
　　―過去・現在そして将来」
　　通　訳　桃山学院　西口　忠氏
見　学　東北大学記念資料室
　　案内　永田　英明氏（同資料室）
懇親会　東北学院同窓会館にて開催
　　出席者 84名

東北大学記念資料室の展示見学（10月13日）

全国大学史資料協議会

1997年度役員会議事録（抄）

日　時　1997年10月13日(月)
　　13時30分～14時30分
場　所　東北大学　金属材料研究所　講堂
出席校　西日本部会幹事校
　　桃山学院　関西大学　同志社大学
　　福岡大学　立命館　龍谷大学
　　関西学院　神戸女学院
　　東日本部会幹事校
　　神奈川大学　中央大学　東海大学
　　慶應義塾大学　武蔵野美術大学
　　明治大学　東京農業大学　玉川大学
　　日本大学
　　会場校
　　東北大学　東北学院大学
　　宮城学院女子大学
議　事　(1) 全国大学史資料協議会総会の運営について
　　(2) その他

なお、臨時役員会を10月14日(火)に開催し総会において、提起された件を審議した。

全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録（抄）

第９回の東日本部会幹事会は全国大学史資料協議会1997年度役員会として開催された。

第10回　1997年11月26日(水)　13時～14時30分
会　場　明治大学駿河台研究棟4F第1会議室
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　國學院大學　玉川大学　中央大学
　　東海大学　東京農業大学　日本大学
　　武蔵野美術大学　明治大学
　　中野　実氏（東京大学史史料室）
議　事　(1) 1997年度の部会運営について
　　(2) 会報発行・パンフレット作成・記念誌編纂の件について
　　(3) その他

第11回　1998年１月22日(木)　14時～15時
会　場　中央大学駿河台記念館　350号室
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　國學院大學　中央大学　東海大学
　　東京農業大学　武蔵野美術大学
　　明治大学
　　中野　実氏（東京大学史史料室）
議　事　(1) 1998年度の部会運営について
　　(2) 会報発行・パンフレット作成・記念誌編纂の件について
　　(3) その他

全国大学史資料協議会
1997年度全国研究会記録（抄）

（第７回東日本部会研究部会）

日　時　1997年10月14日(火)～10月15日(水)
会　場　10月14日　東北大学
　　金属材料研究所　講堂
　　10月15日　東北学院大学　67号館
　　５階第３～５会議室　中央図書館会議室
参加校　東日本部会　25大学（41人）
　　９個人会員
　　西日本部会　19大学（31人）
　　１個人会員
　　総計　45大学（77人）10個人会員

１．基調報告　10月14日　東北大学
　　金属材料研究所　講堂
　　報告　１　中川　学氏
　　（東北大学百年史編さん室）
　　（演題）「大学史編纂と資料保存の現状
　　―東北大学の場合―」
　　報告　２　出村　彰氏
　　（東北学院大学副学長）
　　（演題）「学校史編纂の課題と目標」

２．パネルディスカッション
　　10月14日　東北大学
　　金属材料研究所　講堂
報告　１「総合学園の年史編集について」
　　三好　一成氏
　　（大乗淑徳学園　長谷川仏教文化研究所）
報告　２「国士舘創立80周年記念誌（写真集）づくり」
　　佐藤　芳郎氏
　　（国士舘大学　国士舘資料室）
報告　３「関西学院百年史編纂と資料編」
　　川崎　啓一氏
　　（関西学院　学院史資料室）
司　会　熊　博毅氏
　　（関西大学事業局出版部出版課）
　　松崎　彰氏（中央大学大学史編纂課）
書　記　中川壽之氏（中央大学大学史編纂課）

３．見学　10月15日　東北学院大学　67号館
　　５階第３～５会議室　中央図書館会議室
　　講演「初期東北学院の文学者達―『各論』編をめぐって―」
　　竹井　一夫氏（藤　一也）詩人・評論家、元東北学院資料室
　　午前、竹井一夫氏から同校の沿革、百年史編纂の経緯、所蔵史料の保存と展示の概要をうかがい、中央図書館貴重書庫の展示を見学。
　　午後、宮城学院女子大学からバスのご手配をいただき、同氏の案内による東北学院の文学者達の碑を訪ねて仙台市博物館、青葉城周辺、東北大学を巡る、バスハイクを行った。

※報告、パネルディスカッションの内容につきましては、本号に掲載した諸報告をご参照ください。

全国大学史資料協議会東日本部会
研究部会記録（抄）

第８回　1997年11月26日(水)　14時30分～16時
会　場　明治大学　駿河台研究棟
　　４Ｆ　第１会議室

参加校　22大学　1個人会員　31名
報　告　柏村　哲博氏
（日本大学大学史編纂室）
「日本大学大学史編纂室における百年史記念事業 ― 特に『日本大学百年史』第1巻について ―」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した柏村哲博氏の報告をご参照ください。
第9回　1998年1月22日(木)　15時～16時40分
会　場　中央大学駿河台記念館　350号室
参加校　17大学　2個人会員　26名
オブザーバー　2名
演　題　「戦後私立大学政策研究の課題と史料」
講　師　土持　法一氏
（東洋英和女学院大学教授）
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した土持法一氏の報告をご参照ください。

ミニ情報

※ 大隈内閣成立100周年記念展「早稲田と自由民権」

期間〔1998年〕3月25日(水)より4月30日(木)まで
10時より17時まで（土曜日は14時まで
日・祝日は休み）
会場　大隈記念展示室
（早稲田大学2号館1階）

※ 公開シンポジウム「早稲田と自由民権」

日時　4月30日(木)
14時30分より17時30分まで
会場　小野講堂（早稲田大学7号館1階）
主催　早稲田大学大学史編集所
〒169-8050
東京都新宿区西早稲田1-6-1
TEL 03-5286-1814
FAX 03-5286-1815
（早稲田大学大学史編集所）

※『京都大学百年史』関係の出版

昨年百年を迎えた京大は、『京都大学百年史』としてまず部局史編（全3巻、A5判、横組、3200頁）と写真集（A4判、213頁）とを刊行した。写真集は全体を6期に区分し（新制京大発足は1945年から）、各時期を特徴的事項で構成する。略史、年表もある。意欲的な編集姿勢が窺える。今後の予定は総説編（全1巻）は98年度に、資料編（全3巻）は来年度以降ということである。

※『年譜 1877－1977－1997』（東京大学史史料室編）

昨年の120周年を記念して刊行された。百年史以後の20年間を主対象にして1年見開き2頁で構成され、A4判、48頁の写真を多用したハンディーな冊子である。
（以上2点の紹介は、本会報編集担当者）

ご案内

◈「全国大学史資料協議会」案内パンフレットを発行

本協議会の案内パンフレットが近く発行される。

パンフレットは、アート紙、カラー4色、A4判三つ折りで、表紙に協議会名称とその英文名、会の名称・広がりを表わした本協議会のシンボルマークがデザイン化されている。

内容は、本協議会の設立趣意、沿革、規約、活動状況、刊行物、会員校、入会案内と写真数点が入る。

◈全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。

〈事務局〉
中央大学広報部大学史編纂課
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
☎ 0426－74－2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎ 045－481－5661
東海大学資料室
〒151-0063　渋谷区富ヶ谷2-28-4
☎ 03－3467－2211
中野　実（東京大学史史料室）
〒113-8654　文京区本郷7-3-1
☎ 03－3812－2111